
オレたちのバレンタインデー

貴志イズミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレたちのバレンタインデー

【Nコード】

N7463F

【作者名】

貴志イズミ

【あらすじ】

男子進学校・T高校。バレンタイン迫る二月、戦いは幕を開ける。
(※実在の団体・企業・人物などとは一切関係ありません)

1 謎の配布物―オレ（前書き）

> i 3 1 6 7 ― 5 1 9 <

1 謎の配布物―オレ

『「バレンタイン」及びそれに類似する言動を本校は堅く禁じる。あつてはならないことである。世の中でバレンタイン旋風が吹き荒れ、友チヨコや義理チヨコや木命チヨコが飛び交う中、我々は沈黙を守らねばならない。日本人の追隨精神について本校の賢明な男子諸君は愚昧にも程があると思っていることだろう。

もし、本校生徒がそのような言動、またその素振りを見せれば、生徒会長直々に呼び出し三時間のオセロの相手役を命じる。

T 高校生徒会』

「……何だこれ」

朝の会で配布された臨時の生徒会報を見て、オレは唾然とした。恐らく手書きであろうと思われる毛筆が途方もない憤怒を表している。そして憤りに忘我したためか、「本」が「木」になっているのがなんとも痛い。

「副会長Iの引いている糸らしいよ」

隣席のOが本日数学の課題である複雑な数式を素早く解体しつつ答えた。

「待て、有り得ないだろそれ。たかが副会長ごときにそのような権限があるかボケ。大体会長とオセロをする意味が分からん」

ツッコミを入れたつもりだったが、Oは全く取り合わない。知的な表情を崩さずシャーペンで神速で走らせている。

「Iは虎の威を借る狐だ。」

生徒会長Zといえば総理大臣も頭の上がない世界的大企業の息子。機嫌を損なわせたら僕たちの存在さえ抹消されかねない。そして悪いことに、彼のオセロは下手の横好きなのだ」

ここまで言われて、オレにも会報の真意が分かった。

「暴政だ。オレたちのひそかな期待と不安と歓喜と落胆の時節を棒

に振らせるつもりか」

拳を握り締めるオレを、Oは軽く諫めた。

「そう好き勝手言わない方がいい。副会長の手勢がこのクラスにいないとも限らない。抑えろ、この苦痛に耐えた後には、きっと春が待っている」

オレは頷き、なんとか口を閉ざした。しかし次の瞬間、その封印は早くも破られることとなる。

「うわあっ、大変だっ」

バレンタインデーに自分にチョコレートを渡しに来る女子が少なからずいることを、はつきりと思い出してしまったのである。

「O、もしかして、副会長の圧政は校外にも及ぶのか」

Oは相変わらず冷静な声で、

「ああ、むしろその方がメインだろう。金で雇われた者や副会長の考えに賛同する者がT高生の周囲を嗅ぎ回る。学ランは全て敵と思え」

なんということだ。オレのこれからの数日間は危険に満ち溢れている。いったいどうすればよいのだろう。

2 女の意地―K子

またこの季節が来た。

あいつは今年も、馬鹿みたいに女子からのチョコレートを期待しているのだろうか。

曇りがちの夕暮れの空を、カラスの親子連れが横切った。頭上の古い電灯がバチバチ言っている。部活の皆と一人方向の違うあたしは、賑やかに校門を出ると、突然無口に変身する。

――そうよ、そうに決まっている、毎年あのルックスとあの性格で、ご苦労なことだ。

今年からはもう学校も違うから、幼なじみのよしみでチョコをやるなんてことはなくていい。やったね、なんていう解放感。

女子校のバレンタインって、いったいどんななんだろうと同時に考える。やっぱり嵐のようにチョコが飛び交うのだろうか。友チョコというやつが。そういえば、あいつに作るのにいまいしくも夢中になって、友チョコなんてのは作ったことも、お目にかかったこともない。

でも、こんなにあいつのこと話してるからって、イコール好きなのではない、決して。

んなことを考えていたら、狭い道で、横をすつと通り抜けようとする学ランがいた。

あっ、あいつだ。

「ちょっと」

幼なじみのよしみで一応話し掛ける。あいつはなんだかひどく強張った顔で振り向いた。

「なんだよK子」

久々に会ったというのにつれない返事だ。

少し意地悪したくなって、薄笑いを浮かべて不細工な顔を見つめた。

「ねえねえ、知ってる？ もうすぐバ」

「わ—————っっっ」

なぜか慌てて遮る。唾が思いきり飛んできた。

「な、何叫ぶ必要があんのよっ」

思わず声を荒らげると、あいつは我に返ったように目をぱちくりさせた。

「あ、……すまん。なんでもない。それで、なんだっけ？」

おかしい。もうすぐってこの時期に言ったらバレンタインでしょ。少なくともこいつとあたしの間では去年までずっとそうだった。忘れちゃったのかしら……。も、勿論淋しくなんかない。お荷物が自分から消えてくれてよかった。

「それよりもK子、もうすぐ、その……」

自分で駄目にした話題を自分で蒸し返してきた。意味が分からない。

あたしはかなりいらつきながら答えた。

「何よ、……もうすぐバレンタ」

「ぬおおお—————っっ!!」

また遮られた。もうっ、いい加減にしてよっ。

「そんなに怒るなよ。オレだって好きでやってるわけじゃないんだ。それでその、お願いなんだがK子、今年の、その……それは、ちよつとやめてほしいんだ。メーワク、というか……」

……え？

「と、とにかく、今年はあるは作らないでくれ。あ、他の女子にも言っとけよ。今年はいらねえ」

一生懸命唇をすぼめて言うあいつが、急に遠くなったような気がした。——カノジョ、でも、できたのだろうか。まさか。こんなやつに？

ま、まあ、これでもう、チョコ作る手間は省けたわけね。あー、せいせいした。

「そう。もう今年から作らなくていいのね。分かったわよ、……さ

よなら！」

どういいうわけか涙が出そうになって、あいつを睨み据えて言い捨て、自転車に乗った。

「おい、ちょ、オレはそういうつもりじゃ」

そういうつもりなんでしょ、もう結構！

全速力でペダルを漕いだ。胸が締め付けられるように痛い。なんだろう。——気付くと、自分の部屋でクッキングの本を開いていた。チョコレートを使ったお菓子の数々が、ページをめくる毎に美味しそうに現れる。

「……作るんだから、今年も」

なんだかよく分からないけど、今年もあいつに作ることにした。絶対、美味しいの作って、あいつに渡してやる！

3 考える人―オレ

許せK子。お前の丹精込めたチョコレートであってもオレの命には替えられない、そうだろう？ 思えばオレにチョコを渡すほどの勇気のある女はお前だけだった。この辛い時期が終わったら、お前と付き合ってもいい。

さて、これでとりあえずは安泰だろう。しかし、K子がオレを慕う女子全員に伝言を伝えられるとも思えない。これからしばらくは気が抜けないな……。

「O、昨日例の件はなんとか片付いたぞ」

「よかったな」

安心のためか寝過ぎて遅刻した。一時間目の授業中に耳打ちすると、Oは神速で教師の述べていることをノートに写しながら、相変わらず無表情に言った。

……………。Oの反応はいつも淡泊だと分かっているものの、親友の喜びと一緒に分かち合っていて欲しいものである。

「ところで、お前は大丈夫なのか？」

オレには敵わないが、Oもなかなかのモテ男だ、なんらかの対策を打たないと生徒会室のオセロが待っているだろう。

「いや、僕は……」

「なにっ、まだなのかつ」

なんとということだ！ ここは、オレが助けられないで誰が助けるだろうか。

「オレとお前とは義兄弟の契りを結んだ仲だ。是非とも手助けしようではないか」

「いつ、僕が君と義兄弟になったんだ」

Oが呟いた。覚えていないのか……！ 憤慨し、返答しようとしたその時、教師からチョークが飛んできた。オレとOはそれを巧みに避け、話は次の休み時間に流すことになった。

「それで、お前はこの先どうするつもりなんだ」

チャイムと同時に聞いた。

「……君は話をする事と自体が僕たちに危機を招いていると分らないのか」

先程の授業で出されたくそ難しい宿題を物凄いシャープペンさばきで処理しながらOは答える。心なしか表情が強張っているようだ。オレは彼の心中を察した。

「そ、そうか。少し悪かったな、事を急いってしまった」

「分かってくれればそれでいい」

Oはノートを閉じて、ため息混じりに頷いた。

「僕は君の助けなしでもやってゆける。申し出には感謝するが、これ以上僕に関わらないでくれ」

立ち上がって、教室を出ていった。――副会長め、許せん！ オレとOの友情をこうもあっさりと断ち切ってしまうとは。

直接生徒会室に乗り込んで文句を付けてやりたいが、そんなことをしたら飛んで火に入る夏の虫、奴の思うがままにされてしまうのがオチだ。うーむ……。

そういえば、T高校の生徒会本部は、実態が不透明だ。実は誰が役員なのかさえよく分かっていない。我が校は超進学校を目指しており（実績は未だない）、生徒会本部なぞに現を抜かす暇があるならば勉強をしる体制で、本部役員は学校柄むしろ嫌悪される存在なのである。だから役員選考はじめ生徒会活動もごく内密に行われ、その情報が一般生徒まで伝わってくることは殆どない。

だから今回のような通知は寝耳に水にも程があるのだ。いったい普通の生徒会は何をやっているのかと聞きたくなる。

ん？ そんな生徒会に一番頭を悩ませているのは誰か……

生徒に勉強させるのが仕事の教師だ！

なるほど、いかに虎の威を借る副会長と言えども、会長のいないところを教師陣に取り押さえられればひとたまりもあるまい。

あの馬鹿げた会報は、教師たちもつぶさに読んでいるに違いない。

機会があれば生徒会を潰そうと考えているだろうからな。

ここは教師を味方に付け、悪の巣窟である副会長の尻尾をつかんでやろうではないか！

4 すりかえられた疑惑―Teacher. A

私は、一時間目に早速出鼻をくじかれてしまったことに憤慨していた。原因は、勿論例の「問題児」だ。

始業ベルの数分後に悠々と入室し、教卓の前を大きな欠伸で通り過ぎて席に着くなり隣席のOにちよっかいを出す。最も生徒会本部疑惑の濃い者だ。ひよっとしたらあの会報を出したのもあいつかも知れない。

思いながら、職員室で昼休みに次回の授業の計画を立てていると、
「Teacher. A」

ざらざらした、清涼感のかけらもない声が聞こえた――あいつだ。立ち上がってじろりと睨んだ。問題児はほうけた目でなんとはなしにそれを受け止めると、スタスタ近づいてくる。

「なんだね。数学についての質問ならO君にしたまえ。キミの親友なのだろう？」

問題児はOの名前が出ると私から目を逸らした。

「――副会長Iの計略に嵌まりてfriendship崩れぬ。Teacher、子はmy担任なればお願い致したきmatter侍り、参り候」

英文と古文を微妙に織り交ぜた彼なりの敬語表現は教師の間でも評価の分かれるところだ。私は絶対に評価しないが。

「なんだね」

「担任」という言葉を出されたので、仕方なく答えた。

問題児は辺りを窺った。だいたい、彼が入ってきたことからして、職員室はさざ波立っていたのに、担任と話をしたいということになると否応なしに注目が集まる。それに気付いているのかいないのか、彼は声をひそめて、

「Teacher、筆談致したく存ずる」

私の机から紙切れと鉛筆を勝手に取ると、いつもテスト採点時に

苦勞するあのミミズ文字を書き始めた。

【先日の生徒会報についてどう思う？】

なんとか読み取る。筆談では敬語を遣わないのかおのれは。

【見た。いったい誰が書いたのだ、あんなもの】

同じ紙に返事する。彼は期待通りだと言うように大きく頷いた。

【では、やはりとんでもないと思うのだな。

オレもまったく同意見。なんでも副会長のIとかいうやつが書いたらしい。ふざけているにも程がある】

敬語のないのが癪だが、言っていることはまあ的を得ている。

【先生、副会長を知っているか】

その親しげな言葉遣いはやめろ。だがIという生徒は知っている。この学校にイニシャルIは一人しかいない。恐ろしく不細工でネガティブ志向だが、数学だけは天才的にできる二年生だ。しかしなぜ、こいつが副会長の名を知っているのか？

問題児は黄ばんだ歯をにっと剥き出した。

【そいつが発端なのだよ。オレたちも手を焼いている。先生、力を貸してくれないか】

問題児にけしかけられたことを実行するのはいい気分ではない。しかしそれであの馬鹿げた、生徒に無駄な苦勞をさせる宣言を揉み消し、あわよくば本部を潰せる可能性があるのならば、当たってみる価値がなくもない。

【本人に聞いてみよう】

私はゆっくり大きくそう書いた。

「えー、ではこの定理を応用し、P64の(1)をI、やってくれたまえ」

黒板に黄のチョークで定理を書き終えた直後に指名すると、最前列の分厚い眼鏡とキノコヘアー（他に言い表しようがなくこう呼んでいる）の学ランが、すぐさま低くどもった声で答えた。

「11/5+51i」

正解。この私でさえも学生時代は理解のままならなかった定理を、すぐに使いこなせてしまう彼の脳内メカニズムはよく分からない。

ちょうど一秒後、チャイムが鳴り響いた。日直の号令で、県下一進度が速いと言われる私の数学の授業は終わった。

生徒たちがげっそりした顔で近くの級友と話し始め、騒々しい話し声が溢れる中、Iは机に突っ伏して誰とも話さず、また誰もIと話そうとしない。

私はしばらく授業の道具を片付けるふりをしてIを観察していたが、やがて意を決しその頭を軽く叩いた。

「I君」

キノコヘアーが流麗に揺れ、Iの不機嫌そうな、腫れぼったい唇の目立つ顔が上がった。

「キミは生徒会本部の副会長か？」

ようとして知れない暗い眼鏡の奥が、ちらりと光ったように思えた。

「……何をおっしゃりたいのですか」

黙ってその眼を見つめると、暗黒にじわじわと侵食されるような心持ちがし、慌てて視線を落とした。ボールペン書きの整然とした文字の並ぶノートが目に入った。

「キミが例の会報を書いたのではないかと、専らの噂だよ」

Iは即答した。

「何かの間違いではないですか。俺になぜあんなことをする必要ありますか？ 俺には本部などで他人の面倒をみる暇も、幸福を羨んでいる暇ありませんよ」

あまりにもきっぱりした答えに、少々気圧されてしまった。眼鏡の奥は窺い知れないが、彼の両目が限りなく私への不信と失望に占められているような気がしてならなかった。

「すまなかった。つまらないガセネタだったようだ」

精一杯笑って軽く頭を下げ、背を向けると、憤りを隠せない声が背後から飛んできた。

「A先生、俺を副会長に仕立て上げようとした人物の方が、かえって怪しいですよ。誰ですそれは？」

確かに……やはり当初の見立て通り、あの問題児が犯人なのかも知れない。

「キミも知っているだろう、一学年の問題児を」

「——ええ。彼なのですか」

返事をしなくとも、私とIの間に了解は成り立っていた。

教室を出ると、私は改めて決心した。——あの問題児の言動には、これから気をつけねばなるまい。特にバレンタインデーまでの後幾日かは。我が校の安定と発展を確かなものにするためには、生徒会、殊にあのような会報を出す生徒会の存在は必要極まりないのだ。教師全員で協力し、なんとしても打ち倒さねばなるまい。

5 ご対面―オレ

Teacher. Aに任せれば大丈夫だろう。いけ好かないが、T高校超進学校化には人一倍熱心な教師だ。何か有力な情報をつかんで帰り、早速職員会議の議題に挙げるかも知れない。うまく事が進んできた。

午後は滞りなく終わり、オレはいつも通り物理部に向かった。

物理と言っても実質パソコンクラブのようなものだ。放課後好きなどきにパソコン室に行っては、R-18スレスレの解像度の悪い写真や、かなり過激な描写の文章を読む。毎年一度の研究発表会では適当にコンピュータ・ゲームを出品する。ただそれだけの部活だ。そんなわけだから、部員数さえ把握しきれていない。なぜか一年生にして部長になってしまったオレは大変な苦勞を強いられているのである。

今日も、入室すると4、5人の男どもが一つの液晶画面を覗き込んでニヤニヤしていた。誰も部長の来たのに気付かない。黙って手近なパソコンの電源を入れ、鞆から開発中のソフトを取り出した。

言っておくが、オレはいやらしい写真や文章には興味がない。清廉潔白だ。きちんとした物理実験のために入部したはずなのに、いつの間にか奴らの体のいい雑用係になってしまった。しかもよく分からない伝統で、部長がコンピュータ・ゲームを開発せねばならないのだ。逃げ出そうかと何度も考えたが、結局ソフト完成までは残留することにした。

Windowsの画面が表示される。デスクトップの背景は卑猥な写真が占めているが、こんなものは慣れっこである。ソフトの編集画面を開く。コンピュータ言語がずらりと羅列した。

オレが約一年間開発した成果があって、かなり面白い作品になっていると思う。自慢ではないがコンピュータは得意らしいのだ。

さて、とおしまいの方の言語を書き足そうとしたところ、

「ちよつといい？」

後ろから物凄く陰気な気配と共にもってりした手が肩をつかんだ。振り返ると、顕著なキノコ頭と分厚い眼鏡の男子が、唇を歪めて笑っている。

「あなたが有名な問題児ですね？」

な、なんだって。問題児ではなく優等生で通っているはずだが。なんて無礼な。

しかし初対面の相手にいきなりそんな言葉をぶつけるのも酷だろうと思って、精一杯の笑顔で答える。

「何か用かい」

敬語で聞かれたら敬語で返さないのがオレの主義だ。前にこれをやったら金髪のデカブツにぶん殴られた記憶があるが、キノコは特に拳に唾をかけるでもなく、タラコ唇を三日月形に保っている。

「先日の会報に文句があるそうではないですか」

語気も穏やかだ。だが確実に暗く何かまがまがしいものが眼鏡の奥に隠れている。――副会長の手勢か。

「え？ オレはなんとも思っちゃいないぜ」

言いながら顔が青ざめるのを感じた。なんというプレッシャー。この男……、ただのオタクみたいな容姿、だがその一枚下には、どんなでもない毒牙が潜んでいるに違いない。

そのオレの様子に果たして気付いたのか気付かないのか、キノコは続ける。

「ではどこで、副会長がIであるなどという情報を得たのですか」

Oだよ、と言いかけて、はっと口をつぐんだ。名前を教えたら、奴の身が危険にさらされることは間違いない。

かなりの間の後、なんとか答えた。

「……噂で、聞いた」

明らかに嘘をついていると見破られてしまうだろうが、こうなったらやけくそである。Oはオレに忠告してくれただけだ。巻き込んでしまったら申し訳ないでは済まされない。

「まあよいでしょう。調査すれば分かることです」

キノコはおかしそうにくくくっと小さく声を上げて笑う。

「ではさようなら、問題児君」

のっそりのっそりと、コンピュータ室から出ていった。

——これは、もしかして親友の絶体絶命のピンチではないか……

！？ しかも、こともあろうにオレが引き起こしてしまったピンチだ。こんな呑気にプログラミングなどしている場合ではない。O

……！

あいつはいい、放課後何をしているのだったか。一刻も早く、この緊急事態を知らせなければ。

6 危険な会議―0

西校舎に遮られ、夕陽の当たらない東校舎の奥。光の届かない一角に、僕たちの活動場所はある。

古より伝わりし秘密の部屋、別名資料室。恐らくその存在意義に気付く教師・生徒は殆どいないであろう。「資料室」とは名ばかりの、物置である。年に数回、要らなくなった書類や教科書やその他諸々を持ってきては部屋に押し込んでいく。業者が掃除することは十年に一度あるかないか。

建て付けの悪いドアに手をかける。がたがたと耳障りで野暮ったい音を立ててドアが開くと、

「やあ、待っていたよ書記兼会計君。元気だったかい？」

男にしては少々トーンが高く、しかしねっとりとした声が、積み上がった書類の山の向こうから聞こえた。

迂回路を探す。と、隅から真っ黒なキノコのカサが頭を出した。

「待ちくたびれたよ」

カサの下眼鏡は、心底楽しくて仕方がなさそうに光っていた。

「さ、おいでよ。定例会を始めよう」

——こうして、今日も生徒会本部は活動を開始する。

山を抜けると、薄暗い照明の下、向かい合わせの長机が二つと、椅子がそれぞれ二つ並んでいる。机の横で、貧弱そうな男が独りオセロをしていた。本人は来たるべき相手を想定してシュミレーションしているつもりらしいが、駒の出し方が全く同じなので勝負がつかない。

僕たちはそれぞれ席についた。

「会長！ 来ましたよ」

副会長Ⅰの声に、会長Ⅱは顔を上げた。その肌のなんと色合いの良いこと。またその目つきには、上から命令することに慣れた傲慢さが見て取れる。

「うるさいな、今ボクはオセロ世界王者と戦っているんだ。邪魔しないでくれ」

校内でもこの調子なものだから、彼が会長だということ、オセロ好きであることはほぼ明らかになっている。しかし、非難しようとする教師も生徒もない。なんとと言っても世界的大企業の息子だ、そんなことをしたらどうなるか。たまったものではない。

「……では、とりあえず二人で今日の会議の打ち合わせをしましょう」

Iが言う。これもいつものこと。定例会なんてやったためしがない。

「さて、本日の議題は、アンチ・バレンタインデー計画について、です。」

本校生徒にバレンタインデーなどという俗な行事を享受させないため、俺たち3人で罰していこうということになりました。そのために金で雇った生徒が100人、自ら賛同してくれた生徒が5人、パトロールしてくれています」

金は勿論Zの出資だ。IはZを扱うすべをうまく心得ていて、実質Zは彼の言いなりである。

「今までに校内で2人、校外で20人が検挙されました。ブラックリストを作っておりますから、一人ひとり呼び出して、制裁を加えましょう」

そして、これもいつものこと。僕の意向は一切無視し、I一人で「打ち合わせ」を進めていく。

「――ところで」

Iの口調が、がらりと変わった。眼鏡の奥の光が強くなる。

「1年生の問題児をご存知ですか」

心臓が大きく脈打った。

問題児って……。なぜIがあいつの話を？

「知っていますね、しかもかなり親しいと見える」

タラコ唇がへにゃつと歪む。Iは頬杖をついて、じっと僕の顔を

見つめた。

「ねえ、あなたと彼が級友で、しかも同じ中学出身であることは、分かってるんですよ」

血液が全身を異常な速さで循環している。

「彼が、ある教師に先頃、副会長の名前、俺の名前を密告した。なぜでしょうか、俺とあなたの名前は生徒に割れていないはずなのに」
バカッ、あいつ……！

静かで着実なIのプレッシャー。全身の血管が破裂しそうだ。頭がガンガン唸り、血の気がざざあつと引いていく。

「もしかして、あなたが彼に教えたんですかね。そうだとしたらそれは本部への背信行為。今すぐ会長に制裁を加えてもらわねばなりませんよ——」

「O君？」

7 やってきた学ラン軍団―オレ

〇。どこにいるんだ。そういえば、親友なのにオレたちは、高校生になってから一緒に帰ったこともなかった。今更後悔しているぞ。夕陽の差し込む西校舎を走る。走るとら走る。あちこちの教室から文化部のやつらが顔を出し、走るオレを驚き見つめている。

この辺りにはいないようだ。しかし先程靴箱には靴が入っていた。校内にいることは確かなのだ。

――もう捕まってしまったのかも知れない。会長とオセロを……そうとしか考えられん！

こうなったら、乗り込んで助けるしかないだろう。オレの蒔いた種だ。オレが犠牲になっても、あいつを助けねば。

そうと決めれば話は早い。オレは立ち止まり、両手をメガホンにして叫んだ。

「オレ、K子にチョコレートもらうんだー！！！！」

一瞬の沈黙。教室から顔を出していた男どもがオレを凝視して口をあぐり開けた。お前馬鹿か、という目だ。

空気がざわめいたかと思うと、廊下の向こうから学ラン軍団がやってくる。先頭の、いかにも不細工な五人組は肩をいからせ、物凄い形相だ。後に続く学ランどもも金髪やらタバコをふかしているのやら不良ばかり。

五人組の一人、リーダー格らしき男が言った。

「おい、そこのお前。今、聞き捨てならないことを言ったな」

オレは踏ん反り返った。

「ああ、言っただ。K子からチョコレートもらう、ってな」

瞬間、男の頭からごおっと湯気が昇った。

「ゆゆゆゆゆ、許せーん！！！！」

不細工な顔が更に歪む。

「てめえら、制裁じゃー！！」

男どもが「おおー！」と唸った。飛び掛かってくる！

……と思いきや、後ろの不良どもが、スラックスのポケットから一斉にメモ帳を出した。

「お前、名前は！」

五人組が叫ぶ。オレは拍子抜けして、がくつと膝を折った。

「え、あ、オレは……」

まるでオレが負けたみたいじゃないか。気に入らない。

「こ、う、い、う者だ！」

生徒手帳を高く差し上げ（ふっ、こんなときのために生徒手帳はあるのだ）、刑事風に言ってみた。しかし期待した反応は得られず、
「貸せ。」

おい者ども、言うぞ、こいつは1年の……」

呆気なく不良どもにクラスと名前をメモられた。

「――よし。撤収！」

不良どもがメモ帳を学ランにしまいうやいなや、リーダーは命じた。
……あれ……？ おい、ちょっと待……

学ラン軍団が廊下の奥に消えていく。

やばい、想像してたのと大分違うぞ。これではOを助けられない
上なんだか間抜けではないか。

うわあっどうしようどうしよう。事態は一層悪化してるぞ。

ここは落ち着いて考えよう。そうすればきつと何か……。

8 燃え上がる怒り―K子

女子校は、やっぱりバレンタインの話題が豊富だ。

一日中皆の話にひそかに耳を澄ませていてよく分かった。この時期、話題の約5割がバレンタインネタ。誰かが思い出したように言えばすぐ花が咲く。友チョコはどうするとかお父さんには作るのかあのひとは受け取ってくれるかしらとか……。大半は一番最後のネタを話したがる。

でも、この騒ぎの中で、号泣している子を何人も見た。こっそり聞き耳を立ててみると、どうやら皆、T高生の彼氏に、やんわりと交際を止められたらしい。事情は聞かないでくれ、決してお前のことが嫌いになったんじゃない、許せ、と。「別のオンナができたに決まってる」と被害者たちは怒っている。――あいつと同じだ。

最近ちよっとおかしいんじゃないのT高生は？

「ねえK子」

休み時間に、隣のクラスの友だちがやってきた。この子も、T高生にフラれた一人だ。

「F工業の男の子と合コンしない？」

「え？」

しかめ面。確か、この子カレに相当ぞっこんだったはず……。

「いいのよあんなやつっ！　こそこそ何か隠して理由も言わないで！　もうイヤッ」

女心と秋の空？

「で、どうするの。あと一人なのよ」

行く気はない。あたし、一応、……一応だけどさっ、あいつに作るから。もし彼氏でもできたら、誤解されちゃうかも知れないじゃない。

「ゴメン。行かない」

笑顔で答えた。彼女は残念そうに苦笑いする。

「K子可愛いから男子が簡単に喜んでくれて楽なんだけどなー。

ま、他当たるわ」

合コンねえ。何回か行ってみたけどよく分からない。やっぱりあたしの心の中にいるのはいつも……

……？ 合コン？

……ああっ！！

頭に電流が走ったみたいに強烈なひらめきが舞い降りた。思わず叫んでいた。

「T高生のやつら、集團合コンしてるのよ！」

しいん。キャピキャピとうるさかった教室が、急に静かになる。

「あいつらがあたしたちを避けるのも、フるのも、合コンをしているからなのよ。後ろめたくて言えないんじゃないかしら。幹旋してるのはきつと生徒会ね」

言いながら、自分の頭に血が上っていくのを感じた。

「報復よ！」

あたしの金切り声に、何人かが力強く頷いた。

「バレンタインデー、皆で大量のチョコを持ってT高校に乱入しましょう！ 浅薄な男どもを叩きのめしてやるのよ！！」

いつの間にか、皆の目に炎が宿っていた。女子校のお目当てはだいたい男子校と決まっているものだ。他に取られては黙っていられない。しかも集團合コン？ ふざけるな！

「打倒、集團合コン！」

「おーっ！！！！」

あたしの掛け声に、皆は頼もしく応じる。

——バカ男、よく見てな。ギャフンと言わせて、何もかも元通りにさせるんだから！

9 確信—Teacher. A

あれから何日かは、何事もなく過ぎた。

問題児は問題児らしくない態度で真面目に誠実に日々の授業を受けている。Oとは仲直りしたようだが、ちょっかいを出すこともなくなった。そうあってほしかったはずなのに、いざそうなるとなんだか気味が悪い。おかしい。おかしすぎる。

かえって生徒会本部疑惑が深まった。私に気付かれたから、懸命に取り繕おうとしているのではないか。そう思えてならない。

——そして、今日は遂にバレンタインデー。この日のために、協力的な教師何人かにこれまで以上の注意を呼びかけておいた。怪しい言動はつぶさに観察すること。もし本部勢力らしき者が生徒に危害を加えそうになったら、捕まえて厳しく問い詰めること。あんな大仰なことを書いていてもまだまだ子どもだ、ボロを出すに違いない。

準備は万端。本部のやつらめ、後悔するがいい。生徒会の息の根を止めてやる！

「ではこの問題を、O、答えてくれ」

英語問題集を開いて内職しているOを指す。慌てた様子もなく、Oは下に重ねてあった数学のノートを取り出す。

「83±41iです」

無駄のない答え。OにはIに似通ったものがある。数学の驚異的な能力といい、物静かな雰囲気といい。もっとも、Oは秀才タイプだし、Iのように陰気であるがゆえの静かさではなく、冷静沈着な性格のために落ち着いた空気を纏っているのである。

最近、なぜか私は、この二人の間になんらかの繋がりがあるのではないかと気になる。別に彼らが友人であろうと兄弟であろうと、そんなことは全ての生徒を平等に扱わねばならない教師には関係がないはずなのだが、どうしてか授業でIとOを見る度に考えてしま

う。あるまじきことだ。心を律しなければ。

チャイムが鳴った。週番の号令。いつものようにざわざわと騒ぎ始める生徒。

教室によく目を凝らしてから退出しようとする、問題児とOがひそひそ話しているのが目についた。互いに耳打ちしている。明らかに怪しい。そんなことをしないと話せない内容なのか。

片付けるフリをしながらそちらに神経を集中させた。問題児のざらざらした声がかろうじて聞き取れる。

「……で、どうするよO。どうやって例の計画を……」

むむっ。むむむむむ。怪しい、あからさまに怪しい会話だ。「計画」とはなんだ？ 問題児め、大人しくしていたと思ったら、ろくでもないことを考えていたか。しかもOまで巻き込んで。

けしからん。やはりお前が糸を引いていたんだな。

恐らく「計画」が一番忙しくなるのは今日の放課後。こいつを見張っていよう。のこのこと飛んで火に入る夏の虫、覚悟しろっ！

10 ささやかな回想―O

A先生が僕たちをひそかに見ているのが感じられる。聞こえるのだろうか？ 駄目だ、これ以上喋っては！ この問題に教師を関与させてはならない。今の本部は気に入らないが、生徒会は学校に必要なものだ。むざむざ潰させるわけにはゆかない。

あいつはA先生を一向に気にせず、ぺらぺらと喋りまくる。

「で、オレたちもパトロールに加わるんだよね？」

僕は堪えられなくなって、彼を引っ張り教室を抜け出した。

あの時――Iは一旦黙って僕の苦しんでいるのをこの上なく楽しそうに眺めたのち、会長にオセロをするよう頼んだ。もう駄目だ、そう思った。だが、

「ボス！」

大勢の足音が響き、軽いノックの後、資料室のドアの向こうから声がした。Iはチツと舌打ちをして答える。

「なんです？」

声は、喜ばしそうに言った。

「実は、アンチ・バレンタインデー計画に新たに加わりたいという者がおりました……」

Iは、少し考えてから言った。

「その方だけ中に入れなさい。あなたたちは巡回を続けてよろしい」「はい、承知しました！」

しばらくして、ドアが野暮ったく開く音がし、書類の山がざざあっと雪崩を起こした。雪崩は長机を半分ほど埋めた。本部役員はしばし絶句した。せっかくうまく積み上げて隠してあったのに……。しかし僕が本当に絶句したのは――

そこに立っていたのが、あいつだったからだ。

「おやおや、誰かと思えば問題児君。ちょうど今、あなたの噂をしていたところですよ」

Iが猫撫で声で言う。だが言葉の隅々まで僕へのお仕置きを邪魔された怒りが染み渡っている。

「なんでも、O君にそそのかされて、A先生に俺のことを喋ったとか。大した度胸ですね」

「そうだそうだが、Iにはボクがついているんだぞ！」

Zがここぞとばかりに声を張り上げる。あいつはIを認めると一瞬目を丸くして、

「Youに誤解させしこと、very申し訳なくおぼゆ」

深々と頭を下げ、それから普通の口調に戻って話し始めた。

「オレはあんたたちの計画に加わりたいたいと思って、Oにそう伝えたんだ。するとOは自分で探して直接頼めと言った。だがオレがあまりうるさく言うものだから、とうとうIというて名前を教えてください」

Iがぎろりと僕を睨む。本当なのか、と問いかけるように。僕は心中では動揺しながらもこっくり頷いた。

「だがオレは、Iさん、度胸がないから、Iさんのクラスに行けなかった。そこでTeacher・Aをけしかけて、副会長の配下がオレのところに来るように仕向けたんだ。期待通り、来てくれたよ。ただ、まさか副会長直々に来てくれたとは気付かなかったが」

こいつの言っていることは、もしかして殆ど本当なのか？ いやそんなはずは……。だが僕がそうだと信じ込んでしまうくらい説得力のある話しぶりだ。

「ところがオレはまたしても度胸がない。Iさんに何も言えず、かえって反対しているという印象を残してしまった。それに、誰に聞いた、と問われても、Oが罰せられるのではないかと恐れて曖昧な返事をしてしまった」

Iは、疑わしげな顔で、あいつを見据えている。

「だから、わざと捕まって、本部に連れていってもらおうとした。だが、今の段階ではブラックリストに載るだけなのだね。そこで、遂にオレも腹を括り、パトロール隊にその旨を伝えた」

I がぱしぱしと湿った手で拍手した。

「本当ならご苦労なことですね、問題児君」
隠喩の意味合いが強い。

「本当だ」

あいつは瞬き一つせずきっぱり言い放った。

「オレはバレンタインを憎んでいる。少しカッコついているだけの男ども、やつらにキャーキャー言ってチョコレートを渡すおさんかな女ども。二つとない醜悪な光景だ」

I の皮肉に歪めていた唇が真一文字を結んだ。眼鏡はまだ油断ならないと光っているが、彼の気持ちがぐらぐら揺れているのが見て取れる。

「なあ、仲間に入れてくれ。オレ、きっと役に立つから」

I は静かに僕を見た。僕はなるべく平静を装って、

「すいません、名前を勝手に教えてしまって。——でも、彼の人格は保証します」

完全には信じそうにない。だが、とりあえず危機は脱したのだ。

「分かりました。O 君の失態はなかったことにしましょう。

問題児君、あなたはアンチ・バレンタインデー計画の一員です」

I が硬い声で言った。

11 愚痴と疑問―オレ

「しかし、未だ計画打倒の見通しがつかないとは……」

廊下に出ると、オレはため息をついた。

――あの時の演技は、我ながら大したものだったと思う。そのおかげで、オレたちは見事Iの懷に飛び込めたのだから。

勿論、オレがアンチ・バレンタインデーに賛成するわけがない。毎年楽しみにしている行事だ。オレに渡す勇気がなく泣き寝入りする女ども。そうかといえばモテるオレを羨む男ども。あれ程痛快なことはないだろう。

「もう、諦めるしかないよ」

Oが首を振る。

「とにかく助かったんだ。それに、君はK子さんのを断ったし、僕も女の子に見つからないよう通学路を変え、期間中は塾にも通わない。これで充分だろう?」

「いやだ」

充分なものか。確かに、以前はそれでいいと思っていた。だがよく考えてみる。同じ生徒からの圧力ごときで、青春の楽しみをむぎむぎ捨てられるか。それにブラックリストに名前を書かれた他の男どもも憐れでならない。

「今日は街中に親衛隊が配備される。副会長の周囲はがら空きだ。

Iを討つ空前絶後のチャンス!」

「今にも本部に殴り込みそうな勢いだね」

Oが呆れたように呟いた。

「君も先日親衛隊の一員になっただろう。持ち場を抜け出したらひどい目に遭うぞ」

うむ。しかも、なんだか知らないが、あの不細工五人組と共に親衛隊の一個中隊長に任ぜられてしまった。

「有志の5人が、君を是非同列に置きたいと、切願したそうだよ」

なぜだ。

……まあ、とにかく。Oの発言にも一理ある。下っ端の一人や二人、いなくなっても気付かれないうだろう。だが、隊長が、となると、大分事情は異なってくる。

「非常に厳しい状態だね。手下も相当な金額で雇われてるから、そうおいそれと君の脱出を許すとは思えない」

ぬううう。なんと八方塞がりな……。

予鈴が鳴り始めた。Oとオレはなんとなくいたたまれない気持ちのまま、教室に戻った。

授業中、消しゴムを弄びながら考える。

そもそも、バレンタインデーを待ち遠しく思わない日本人男性はいるのか。そりゃ、外国の下手な猿真似だとか、そういう批判はなくもない。だがそれでも我々の習慣として、ひそかにどこかしら期待しているのではないか。俗だとか、そんなことは言い訳に過ぎない。副会長らも結局、己がもらえないゆえにもらえる者をひがんでいるだけなのだ。

それなら、もらえないもらえないと嘆いて恵まれた者の邪魔をするより、少しでも状況を打開する努力をしたらどうなのか。

12 計画実行―K子

7時間目のチャイムが鳴るのと同時に、あたしたちは教室を飛び出した。後ろ手に大量の包装したブーツを持って。

校門を出たところで思いがけず学ラン徒歩グループと出くわす。10人程度だが、険しい表情でガンを飛ばしてくる男子たち。着崩し具合から見ると……T高校の連中。いったい何者？

怯まず睨み返す。こちらは自転車だ。いざとなったら走って逃げられ……

「かかれっ！」
「るっ？」

先頭のあばた面の男子が、あたしたちが自転車のカゴに入れたブーツに目を留めるや、背後に控えていた不良っぽい男子たちに命令した。

たちまちあたしたち自転車隊の後尾の女子に襲いかかる。

「キヤーツ！」

黄色い悲鳴。自転車が次々に止まる。

「みんな、だいじょぶ!？」

返事はない。こちらの方が数の上では圧倒的に有利なはずなのに、もう阿鼻叫喚状態。

「何すんのよあんなたち、あたしたちをどうするつもりっ」

「どうもしねえよ、ちよっくら静かにしててもらうだけだ」

金切り声、自転車の倒れる音が飛び交う。

あたしたちのアンチ・合コン計画がバレたか……!

その場を離れるに離れられずギリギリと歯噛みして事態を見守っている、例のフラれ組にブーツの包みを渡された。

「K子、アタシはこの状態をどうにか治める。あんなだけでもT高校に乗り込んで」

喧々囂々、凄まじい乱闘を繰り広げる男女を、あたしは呆然と見

つめた。

「でも……いくらあたしでも、一人じゃ……」

「言い出しっぺでしょ。へこたれてどうするの。ここで足止めをくってるアタシたちの想いも代弁して。お願い！」

長い間、あたしたちは見つめ合っていた。いや、あたしが長いと感じただけで、実際はほんの数秒のことだったのかも知れない。

「――分かったわ」

沈黙を解いたのは、あたしの掠れた声だった。

「こうなったら、意地でも合コンをやめさせる」

半ば自分に言い聞かせる。

自転車に乗り直した。背中に、少しの躊躇いと、甘酸っぱい感情のこもった声が届いた。

「もし、もし渡せるようだったら……それ、〇ってやつに渡してくれる？」

あいつのよくつるんでいた男子だ。冷たい感じの、無口で賢そうな男子。たまに帰り道で三人一緒になると、一見つれなそうだけど、実は結構あいつと仲が良くて、やきもちをやいたこともあった。

自転車カゴが、小さな段差の度に揺れる。途中、T高校の学ラン集団を何度か見かけた。猛スピードで走っていたのでよく分からなかったけど、なんだかあたしを睨んでいるような気がした。

……というか、気がしたただけではない。明らかに後ろを追いかけてらている！

「そこのお前、止まれー！」

「抵抗するな、女子を傷つける気はない！」

足音や怒号からすると、相当な人数のよう。道行く人がこの一団を凄く訝しげに眺めているのが分かる。

……考えてみたら、なんかおかしい。

あたしたちをわざわざ阻止するメリットがないじゃない。アンチ・集団合コンを知ったとして、あたしたちの突撃を回避するのがせいぜいじゃないかしら。

じゃ、どうして？ あたしはどうして追いかけてるの？

「――止まれっ！」

川向かいのT高校目前、橋の歩道の真ん中辺りで、突然低くざらざらした声が響いた。今まで沢山の制止を振り切ってきたにも拘わらず、なぜかあたしはブレーキをかけてしまった。

その途端、学ランがわらわらとあたしの周りを囲んだ。

「彼方から駆けてくるセーラー服、自転車カゴに入った怪しい物品。T女子高校の生徒か」

声が分厚い学ラン層の中を近づいてくる。

「可哀相だが、今のT高校生徒会の方針により、これ以上その行為を進ませるわけには――」

声の主が現れた。そして、顔を見合わせた瞬間、互いに絶句した。だって、それは……

「K子。なぜ、ここに」

あいつだったから。

13 消えた問題児―Teacher. A

さて放課後。問題児を見張ろうと思っていた矢先に一件電話が入った。かけてきたのは田舎に住む私の父で、なんでもハゲが治る魔法の頭ツボ押しなるものを贈呈してくれるという。早く行かねばとうずうずしながらも、朦朧しかけた父の話くらい聞いてやろうと仕方なく相槌を打つこと一時間。やっと話し足りて満足したらしく、一方的に電話を切られた。とてつもない虚無感に苛まれがくりと膝を折ったところで、職員室の窓から望む校門に突然黒い影が入り込んできた……と思ったら、それは本校生徒の集団なのだった。

ん？ 一番前、大勢に取り囲まれて両腕を押さえられ、じたばたもがいているのは――

問題児ではないか！

そうか、あいつめ、私が手を下すまでもなく、自ら失態を犯し取り押さえられたか。

私は玄関へ走った。しかしいざたどり着いてみると、忽然と集団の姿は消えている。

代わりに、突如として少女が一人、自転車で飛び込んできた。

「なゝ！？」

空気がズバツと私の目の前を走った。

キツと急ブレーキをかけると、そのまま下駄箱の脇に自転車をとめようとしている。

「おいっ」

期待が外れたばかりか少々訳の分からない展開だ。私は思わず苛立った。

「君、どういうつもりかね？ ここは男子校だぞ。しかもそれ以前に、玄関まで自転車を乗り回してくるとは非常識極まりない」

少女はここに至って初めて私の存在に気付いたようだった。

「……あっ、はっ、すいません」

だが心ここにあらずという表情で、口早に私に聞いてくる。

「あいつはどこへ？」

あいつ？

「あいつですよ、あの不細工で遠慮がなくて自惚れ屋で頭の回らない馬鹿！」

……問題児か？

「やつなら、まんまと取り押さえられていたよ。どこへ行ったか、玄関から入ると思ったのだが」

少女はさつと青白くなった。

「捜さなきゃ！」

遠慮なく、白いスニーカーでずかずかと上がり込む。

「おい、君っ」

校庭の土が点々とコンクリートの床に擦り付けられていく。

「どういうつもりかとさっきから聞いているだろう、答えたまえ。もしかしてあいつの仲間か？」

なおも返事がなく、教師に対する昨今の生徒の無礼をひしひしと感じていると、

「これ」

少女が突然振り向いて、私にピンク色に包装された何かを突き出した。

「え？」

「プレゼントです」

成り行きで受け取って、耳の傍で振ってみる。ゴトゴトと、何やら重そうな音と、癖のある匂い。

「では、あたし、急いでるんで！」
言うが早いか駆け出した。

反射的に、私は彼女の後を追った。

「校舎の様子もろくに分からないくせに……待ちなさい、私が案内するからっ」

傍から見たらかなり怪しい光景だろうが、今はそんなことに構っ

ていられない。この少女と協力してでも、あいつを見つけ出すのだ！

14 開戦―O

本部で待機していた僕たちのもとへ「反逆者」が引き立ててこられたのは、バレンタイン掃討作戦を開始して約一時間経った時だった。

「……やはり」

巨漢にのしかかられたばた暴れるそいつを腕組みして見下し、Iは笑った。

「そうではないかと思っていました。馬鹿な嘘つきは必ず尻尾を出します。ね、会長？」

青白いZは威張り腐った顔で巨漢に聞く。

「どのような罪状か」

「はい。パトロール中、チョコレートらしきものを大量にかごに積んだ自転車の女を発見し、取り押さえようとしたところ、隊長にチョコレートらしきものを差し出したのであります。隊長はあろうことか、それを……」

「包装ごと食べてやったんだ」

ざらざらした声が、苦しそうに、しかしはつきりと続けた。

僕は今更ながら、この問題児の無鉄砲さにため息をつく。

「もう隠しようがありませんね」

Iは汚らしい薄笑いを浮かべた。

「どうします、会長？」

Zは既に長机の上にオセロ盤を用意していた。

「勿論、この場でオセロだ！ オセロでボクに勝ったら、その腕前を讃えてとりあえず半殺しで見逃してやってもいい。負けたら――」握り拳に親指を立てると下へ向けて大きく振った。

あいつは一瞬顔を強張らせた。だがすぐにいつもの無然とした表情に戻る。

「いいだろう」

上の重しが退いた。あいつはゆっくりと長机に向かう。どちらにしろ、彼には抹殺が待っているに違いない。負ければ避けようのないことだが、勝ってもZの自尊心が許さないだろう。僕の前を横切ろうとする刹那、すっかり丸聞こえだとは思うが、僕は声をひそめて言った。

「勝っても負けても——」

あいつは口に出して応えることなく、下手なウインクをする、Zの反対側に座った。

15 一進一退―オレ

Zのオセロは本当に滅法弱い。第一、敵の配置に構わず中央に四角形のバリケードを作ろうとすることからして馬鹿げている。この男はオセロのルールをまともに理解しているのだろうか。

しかしオレは、慎重に、なるべく時間をかけて戦うよう尽力する。時間を稼げばまだ望みがあるというわけでもない。が、生存の時間を少しでも長くしたいと願うのが凡人の最後の悪あがきだ。

オレは白、Zは黒。盤はもう半分程度埋まっている。ただ、オレは勝敗をつけるのを避け、Zはこの上なく自分勝手にゲームを進めているため、現在白黒は殆ど同数である。

Iの計略に見事にはまったと言わざるを得ない。権力者の会長Z、勝てば機嫌を損ねる。負けても裏切りの罪が待っている。バレンタインを楽しむ者への最大の嫌がらせだ。こんなにまでしてバレンタインを拒む精神力は、いったいどこから湧いてくるのか？

「……副会長」

ふと、Oが口を開いた。

「トイレに行きたいのですが」

な、なんと！ 幾らなんでもそれはないだろう、親友が生死の境をさまよっているというのに。

「ほう。友人を見捨てるのですか」

Iのねっとりした声が批難がましく響いた。

「いえ、すぐに戻りますので」

Oはいやに穏やかに答える。

では、と言いつつ、資料室のドアの開く音がした。

「……奴を捕らえなさい」

Iの鋭い命令。さっきオレにのしかかっていた巨漢が、慌てて後を追った。遠ざかる二組の足音。

「ふん、バレバレだな。Oの頭脳も所詮そこまでか。助けを呼びに

行こうなんて甘いね」

Zが笑った。なんだ。オレを見殺しにするわけではないのか。いや、胸を撫で下ろす場面でもないが。とにかく友情は証明されたわけだ。

「さあ、問題児、Oとの厚い友情が確認できたところで、ゲームに戻ろうじゃないか。君の黒の動きが大分停滞しているようだが？」

Zが、神経質な笑みを浮かべてオレを見た。

16 近づいてくる真実―K子・Teacher・A・O

あたしと先生は、廊下を走って、校舎の教室からトイレに至るまで一つひとつ中を覗く。あいつの姿はない。ただ顔も知らない学ランがうごめいているばかりだった。

「これで、校舎内はくまなく廻ったはずだ。おかしいな、影も形もない」

先生が息を切らして、校舎最奥部で立ち止まった。

「外に出たということは？」

「まずないな。校舎の窓から周囲は遮るものなく見渡せるのだが、らしい者は見受けられなかった」

どうしよう。あいつはひどい目に遭うに決まっている。馬鹿な奴。いつも自分で災難を振り撒いて、自分で足を取られ。きっと今回だって、結局合コンが嫌になって抗議したに違いない。

チョコレートのお包みを抱きしめる。中身がぐしゃぐしゃになってはいないだろうか、何しろ全力疾走してきたものだから……。

「なんとしても見つけ出さねばなるまい。これは私の、教師としての意地だ」

先生が拳を握り締める。この人も、あいつに何か恨みがあるらしい。

「先生、今度は教卓の下からトイレの掃除用具入れまで捜しましょう。もしかして、校舎のどこかに秘密基地みたいなのを作ってるのかも」

少女と頷き合い、走り出そうとしたその時だった。

廊下の向こうから、何者かがドタバタ走ってくる。

「……っ！ A、A先生っ！」

苦しげながらもなお知的な響きを残すそのテノールは、間違いくOだった。しかしその後ろに迫る黒い影は――

私よりも先に、少女が間に割って入った。

「!？ お前はさっきの」

黒い影——確か二年の不良グループの一員だ——は、驚いて目をぱちくりさせる。

少女は身長差や体格差など意に介さぬ様子で相手を見上げた。

「あんたたちねっ。ここそこ合コンやったりあいつやO君を追いかけ回したり、いったいどういうつもりなの」

……合コン？

私の目は点になった。こいつら、まだ高校生のくせにそんなことを？ 腹を抱えて笑い出したくさえる。そうか。問題児が裏で動いていたのもそのためだったんだな。

「いやー結構けっこう」

我慢できなくなつて、大股で歩いていき、少女の隣に立った。

「君たちの早熟さには感心するばかりだ。ところで君、具体的なプランを教えたまえよ。よかったら私も参加したいな」

勿論皮肉だ。大人となった今にしてみれば、合コンとはいかに華やかでいかに虚しい行事だったろう。

彼は今までの少女の話で大分辟易していた。そこへ更に私の介入である。完全に顔を引きつらせている。戦意を喪失したようだ。

「詳しいことは知らねえ。俺あ、あいつらに金で雇われただけだ。こんな面倒事に巻き込まれんのはごめんだね」

男のプライドを保つためか、逃した敵・Oを睨みつけつつ、私の横を通り抜けていった。

——Oは助かってほつとした顔ひとつせず、間髪容れずに言った。

「先生、副会長たちの暴政を止めて下さい。あいつが、危ない」

暴政？ 副会長？

「会長のZと副会長のIですよ。やつら、あいつをやり込めて……この世から消し去るつもりなんです」

I。彼が？

では、私の目論みが外れていたというのか。あいつが白で、Iが黒？

「大変だわっ。すぐ、すぐに案内して。場所は分かるんでしょ、O君」

私は言葉にならないうろたえを吐き出そうとしたが、少女の言葉に遮られた。

「……K子さん？」

ここで初めて、Oは彼女の存在に気付いたらしい。最初にかばったのは彼女であるにもかかわらず。

「ああ。言われなくてもすぐ案内しよう」

まだ状況を把握できていないまま彼は答え、走り出そうとする。その腕を少女は軽く押さえて、胸に抱えていた包みの一つを彼に押し付けた。

「これ、あんたの元カノから。合コンなんてやめてよね。あのコ、ずっとO君を待ってるのよ」

Oは、はっと目を見開いて、それから力無く笑った。
私は、ここでもうやく、口を開いた。

「O君、君は、生徒会本部なのか？ それに副会長は、間違いなくIなのかい？」

先生に助けを求めるのは最終手段だった。殊に、A先生には。生徒の生徒による生徒のための生徒会、それがどんなに未熟であっても、取り潰して欲しくないのだ。だって、これがなくなったらこの学校は、ただの進学塾になってしまうから。

でも、それが完全に變形し、ただ本部のわがままの上に成り立っている今、そんな綺麗事は通用しない。あいつや、大勢の男の青春いわんや命を犠牲にしてなるものか。僕は涙を飲むぞ。先生、どうにでもして下さい。でも、その後は必ず、僕が立て直してみせる。今回のようなことが起こらない、もっとT高の全生徒・教諭に身近な活動を展開してやる。

資料室をがらりと開いた。見た目は資料の山。だが奥からは、紛れもないIの高笑いが聞こえてくる。

「くくくっ、どうしたのですか問題児君。次を打ちなさい、さあ、早く」

僕が出るより先に、K子さんが資料の山に思いきり突進していった。

17 終幕―オレ

諦念だ。諦めるしかない。もう終わりなんだ。

オレは盤を見てそう思った。手加減していたつもりが、いつの間にかオレの白が大部分を占領している。会長のただでさえ青白い顔が紙のように白くなり、びくびくと不規則な痙攣さえ催し始めた。しかし、諦めの悪いオレ。残り数ヶ所。一応会長Zの顔色を窺って、

「会長、パスしたいのだが」

「勝利を目前にして、何を渋っているっ」

会長は即座にはねつけた。

Iが耐え切れなくなったように、体を折って笑い出した。

「くくくっ、どうしたのですか問題児君。次を打ちなさい、さあ、

早く」

くそっ……。

さよなら、オレのバレンタインデー、オレの青春。O、K子……！

オレは、最後の白に手をかけた――

「やめてええっ！！」

――背後で聞き覚えのある金切り声と、何かの崩れる音がし、視界が白やら灰色やらで乱れた。相当な重量の何かがのしかかってくる。な、なんだこれは。何が起こった。

IとZが紙の山に埋もれている。よく見るとオレもだ。腰までしっかりと紙に侵され、身動きが取れない。

突然、後ろから、何者かに抱きしめられた。爽やかなリンスの匂い。

「馬鹿っ。なんで、いつもこうやって、危険なことに自分から飛び込むのよ！」

K子？ さっき、オレの軍団が追い払ってしまったはず……

「まったく、こんな所にあったのか、生徒会室は。気付かなかった、

頻繁にプリントを破棄しに来ながら。灯台もと暗し、というやつだな」

自嘲気味に響いた声はTeacher・Aか？

「脆いものですね、所詮。高校生がすることなんて」

皮肉そうな最後の声の主に、IとZの顔が引きつった。

O……！

「君たち、馬鹿げたゲームは終わりにしたまえ」

Teacher・Aは授業中と全く同じ口調で淡々と話す。

「本部という頂点に溺れ、自分たちの気に入らないものを排除しようとは。いやはや、やはり生徒会活動とは、生徒になんらよい影響をもたらさない」

キノコ頭が震えた。胞子のように、フケが幾らか空気に舞う。

「つ……先生っ、わたしたちは生徒のために尽くしてきました！

それに間違いはないはずです。バレンタインなど、生徒の健全な学校生活の妨げに他なりません。

ご覧になったことがあるでしょう、バレンタインデーに、校内で華やかかつ幸福な会話が交わされる一方、机に突っ伏し静かに一日が過ぎるのを待つ男たちの姿を。本来、彼らはそんなことで落ち込む必要なぞないのに……大衆の熱狂に流され、ある面での劣等感を感じてしまう。

しかも我が校では、バレンタインデーがちょうどテスト期間です。喜ぶ輩も、悲しむ者も、テストに身が入らない」

いや、それは気の持ちようだろう……と言いかけたが、自らをかえりみて、口を閉じた。中学生の頃、オレは平静でいたか……？ 何かしら心がうきうきして、特に中三の時など勉強に集中できず……うーん。

「えっ？ バレンタインデー？」

K子の腕の力が急に抜け、体が離れるのが分かった。ん？ どうしたんだ。

「確かにそうだな」

Teacher. Aが……同調した!?

「ならば。これからは学校でバレンタインを規制しよう。どちらにしろ、生徒会は廃止だ。まだまだ、大人に管理してもらわねばならぬ年齢なのだよ、君たちは」

おいおい何言ってるんだよ。学校には生徒のプライベートまで口突っ込む義務も権利もないぞ。バレンタインがなくなったらどうなるんだオレたちは。

「いい加減にして下さい!」

Oが突然叫んだ。その場にいた全員がおそらくビビっただろう。彼は普段物静かで、あまり怒鳴るような奴ではない。

「どちらの主張も正しいと思いますよ、その一面ではね。でも、僕たちは押し付けられたくない。自分たちで選び、行動したい。バレンタイン云々など、意識すればどうにでもなるでしょう。なぜ生徒会や学校が世話を焼く必要があるんですか。それは……単にあなたたちの個人的なエゴじゃないか」

一瞬、緊迫した沈黙が走った。

次の瞬間、Iは、うわああっと思ひとも叫びともつかぬ声を上げてOに飛び掛かった。拳が振り上げられる。Oは防ごうと手を伸ばしたが――駄目だ! プリントの山に挟まれて動けない!

「I!」

その時、Zが青ざめた顔でよろよろと割って入った。拳がその右頬をヒット。不健康そうな体躯が吹っ飛んだ。

「か、会長!?!」

眼鏡がずり落ち、糸目がそれでも精一杯見開いている。

「アハハハッ。ボク以外の者の無意味な暴力は許さないよ」
力なく半身を起こして、Zは笑った。

「……! ……………」

その目に光るものに気付いて、Oレははっと胸をつかれた。こいつは悟っている、自分たちの不利を。諦念。Oレがつい先程必死で求めたものを、いともたやすく手に入れている。

「……っ、嫌だああ。ぼくはっ……いつももらえないで、他の奴らをねたんでばかりで……もうっ、そんなの嫌だああ」

Iは、がくりとくずおれた。鳴咽をもらすまいとして堪える鋼鉄の糸を引くような叫びが、延々続くかにみえた。オレは、いらいらした。渾身の力を振り絞ると、体がプリントから解放され、Iの襟首を掴んだ。

「弱虫のへっぴり腰だな、あんたは」
声が止まった。

「妬ましいと思うなら、チョコが欲しいと思うなら、どうして努力しないのだ。オレなんかっこよすぎるから遠慮されちまってもらえないんだぞ。そんな状況よりは一億倍もマシだと思え！」

「それは絶対違う」
なぜか全員に突っ込まれた。オレに嫉妬しているのか。ふっ、オレはなんて罪な男なんだろう。

「とにかく、努力だ。努力もせずに他人をねたむ奴はただの馬鹿だ。とりあえず、まずは床屋に行って頭角刈りにしてもらえ」
襟を放すと、糸が切れたようにIは倒れた。

……終わった、のか……。

「個人の自由よね、バレンタインなんて。そう、日本国民の自由だわ」

頭上で声がした。K子だ。

「あたしたち、ひどい勘違いしてたみたい」

「勘違い？」

オレは訊いた。しかしK子は安心したような、それでいて怒っているような表情で笑っているだけだ。笑っているばかりだ。

「まだチョコ残ってるのよ。幾つか入ってるから、みんなで分けて食べましょ。あ、Oくんは彼女からのやつね」

包みを開ける音がした。

広がるカカオの香り。目の前にどさりと箱が落ちてくる。小振りのハート型チョコだ。

「はーい、あーんして」

K子の眩しい笑顔が、オレに迫った。赤面して目をつぶり、素直に口を開ける。

「あ~~~~ん？」

……チョコの感触がない。

目を開ける。と、K子はなんと、Iの口にチョコを入れていた！

「なっ……ぬわあぁにしてんだK子おお!!」

頭に血が上り、オレはK子ともども殴り飛ばしたい衝動に駆られた。握り拳にはーっと息を吹きかけていると、K子がこちらに軽くウインクした。

「？」

気合いが抜けた。

数秒の空白ののち、

「ぎゃあああ————!!!!!!」

声割れしたIの悲鳴が耳をつんざいた。

「ふふふっ。唐辛子入りチョコレート。元々、合コン野郎を懲らしめようと作ったんだけど。元氣出た？」

女は恐ろしい……。K子の笑顔が悪魔のようにみえた。こいつ、最後の最後でひそかな復讐を？ いや、まさか、な。ただの気まぐれだよな。

苦しそうに、またどこか嬉しそうに悶絶して転げ回るIの姿を前にして、オレたちの闘いは、終わりを告げたのだった。

18 後日談―?

「皆さんっ、T高校生徒会復活運動への署名をお願いしますっ」
かすれた声が、ぼくの耳元をかすめていく。

冬の気配も徐々に後退し始め、空は淡く、薄い雲が掛かっている。
T高校最寄り駅。ぼくは首からクリップボードを下げて、人ごみをぼーっと眺めている。人はみな、ぼくたちをちらりと見ては目を逸らし、歩き去る。ああ、ぼくはこんなところで、いったい何をしているのだろう……。

「……あのー」

飛びかけた意識は、前触れなく引き戻された。

セーラー服の女の子が、ぼくを見ている。利発そうな、小柄な少女だ。

「はっ、……はい。署名して下さい。お願いしますっ」

思わず腑抜けた声を上げてクリップボードを差し出した。彼女は、備え付けのボールペンで、必要事項を書き込んでいく。

「頑張ってください」

一瞬、優しい光を湛えた彼女の瞳が、ぼくに笑いかけた。そして、あっという間に、その姿は人ごみの中に消えていった。

「……………」

笑顔が臉に焼き付いた。何度も、今しがたの場面を頭の中でリフレインする。そういえば、礼を言わなかったな、と思った。

「おいっ、“元”副会長!」

ごっん。

かすれ声とともに、頭を軽く小突かれた。

「なっ、何をするんだ問題児クン」

振り向くと、問題児以下元会長と元書記兼会計が、ぼくをじとーっとした目で見ている。

「……I先輩……ロリコンですか……」

きれいな顔したOクンに言われると後ろめたくなります。……つてぼくはロリータコンプレックスではない、断じて。だいたい中学生と高校生だぞ。

「一人の人間に現を抜かしている暇はないよ。まだ十人しか署名が集まってないんだからね」

元会長が神経質そうに髪をかきあげる。

「いいか、学校を大きく動かすことには少なくとも千人以上の署名が必要で……」

「と、いうか、始業五分前ですよ、先輩」

Oが、腕時計を見て、至極冷静に言った。

「なぜそれを早く言わなかった!」

問題児が叫び、

「皆の者、全力疾走せよっ」

言うが早いか、駆け出した。

「おい、慌てるな」

Oがその後を追う。

ぼくたちは、上級者らしく、ゆっくりと歩き始めた。

「まあ、まだ先は長いしな。Oが会長になる時期までにはどうにかなるだろう」

Zが、白い顔を心なしか綻ばせている。

「I、角刈り意外と似合うな。前よりもずっと、ボクの部下らしく堂々としてみえる」

ぼくは、そっと自分の頭に手を触れた。指先で、短髪が踊る。ふと、目を合わせた彼女の温かい瞳がよみがえった。

「……ありがとうございます」

半分はわがボスZに、もう半分は彼女に、呟いた。

――了――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7463f/>

オレたちのバレンタインデー

2010年10月8日15時29分発行